

# 深く染みこむような余韻

## ■ ディア・ライフ ■

〔著〕 アリス・マンロー  
〔訳〕 小竹 由美子



新潮社・2415円

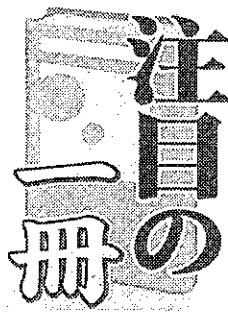
2013年にノーベル文学賞を、カナダ人として初めて受賞したアリス・マンローは今年83歳。本書を自分の「最後の作品」と称し、受賞後のインタビューでは読者に一番に薦めたいと語っている。それが早くも日本語で読めるのは喜ばしい。

授賞理由にあるとおり、マンローは「現代短編小説の大家」であり、長らく「短編小説の女王」とも呼ばれてきた。でもそんな称賛の大げさな響きとは裏腹に、本作のどの短編も静かに展開し、深く染みこむような余韻を残す。

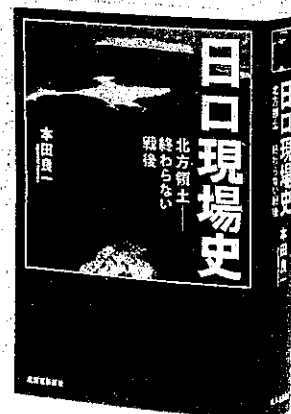
主な舞台は、カナダ・オンタリオ州を思わせる田舎町。多くの物語には第2次

評 榎木 玲子

(法政大学教授)



北海道新聞社・2205円



## ■ 日口現場史 ■

「レボ船」が生まれた。情報は相互的なものだから、日本の公安関係ともいそがなつながらが生まれ、国家の建前とは隔たる怪奇な世界が広がる。

## 複眼

連の崩壊によっても問題は変わっていない。

本書は1年にわたる北海道新聞の連載企画をまとめたもの。多様な現実を率直に伝える複眼的な視線と筆力は並々ならぬものがある。

書評でも必要約し切れないほど、内容は多岐にわたる。これさえ読めば北方領土問題がすぐ分かるといった性格の書でもない。むしろ読書によって現実の混沌を私たちが引き受け、国家の行為と生活者の日常との距離を考へる機会としたい。

沖縄や尖閣諸島を考へる上でも、ヒントを与えてくれる好書である。

## ■ しんがり ■



講談社・1890円

層部に尋ねる。だが、何も情報が出てこない。手をこまぬく間に会社は破綻に追い詰められていく。いったい山一に何が起きているのか。

本書の骨格は経済事件だが、読み

## 心動カ

た同社だが、社を腐らせたのは経営陣や花形部署で、最後の真相究明で意地を見せたのは地味で武骨な支店筋の人間だった。外形的事実を既知の話かもしれないが、内部で起きていたドラマの細部には心を動かされるだろう。

そもそも著者の関心は「破綻後の真相究明」という一文にもならない作業に、なぜ一部の社員が従事したのかという動機にあった。著者は長年所属した新聞社の主筆に反旗を翻した経験をもつ。取材の過程は、著者自身への問いかけではなかったかとみると、別の味わいも出てくる。

## 衝撃だった短い生の爆発



安藤 美冬 (起業家)

## ■ 高野悦子著「二十歳の原点」

「二十歳の原点」(新潮文庫)を初めて読んだのは2002年。留学先のオランダから帰国した直後に、恋人からラゼントされたのがきっかけだった。

本書は、1960年代の学生運動まっただ中の日本に生きた、高野悦子という女性の日記である。不器用な恋に悩み、自分の存在意義に悩み、高い理想と現実との落差で悩み続けた彼女は、20歳という若さで列車に飛び込んだ。死の直前までの心情が露わにしたためられた遺書は、美しく静謐な1編の詩でしめくられていく。同年代の彼女の死は、あまりにも衝撃的だった。



高野悦子

二十歳の原点

高野悦子は、ある理由で伊達メガネをかけていることを告白する。生きていく現実をサバイブするための「防具」としてのメガネだ。少しでも彼女と一体化したかった私は、同じ理由で伊達メガネをかけるようになった。友人と語り合うときも、旅するときも、就職活動の面接時にも、たびたびメガネをかけた。それは私の心の奥底の表れであり、高野悦子のように生を爆発させるといふ決意の象徴でもあった。

それから十数年。2010年代を生きる私は、自立を果たし、将来への漠然とした不安は、いくつもの具体的な夢に変えた。それでも私はメガネをかける。メガネを通してこの世界と対峙している。なぜか、興味がある人はどうか本書を読んでほしい。

## 新刊紹介

「家政婦のミタ」の遊川和彦、「あまちゃん」の宮藤官九郎といった「いま見るべきドラマの脚本家」6人を取り上げ、作品に込められた意図や創作の流儀を、若手評論家が鮮やかに読み解く。

キーワードはタイトルにもある「キャラクター」。漫画やアニメの表現やスタイルを取り入れた作品の出現が、新時代の人間ドラマを生み出していると指摘する。脚本家が東日本大震災をどう描いたかや、ネットとの親和性についても論考。ドラマの味わい方に新たな視点を与えてくれる。(河出書房新社・1680円)

キャラクタードラマの誕生

〔著〕成馬 零一

## ナチュラル・ナビゲーション

〔著〕 トリスタン・グーリー 〔訳〕 屋代通子

携帯端末もガイドブックも持たず、一人旅へ出ることが可能だろうか。便利な道具に慣れ、かつては生きるために必要だった力を失いつつあるのではないかと問いかける。

大西洋を空と海で単独横断した探検家の著者は、地図やコンパスに頼らず、自然を手

がかりに方角を定める「ナチュラル・ナビゲーション」の復活を提唱。星で針路を定める航海術の復活が話題となったハワイの帆船と同様に、古来の知恵を生かし、感覚や知性を総動員する芸術としての技法の魅力を伝える。

光を見て、風を感じ、水の

おいをかぐ。五感を研ぎ澄ませると、ばらばらの存在だった自然現象がつながり合って立ち現れるのだという。「地球という豊かな図書館にある、魅力あふれる蔵書をひもとく鍵」を詰め込んだ本書は、人の心を自然の中へと解き放つ。(紀伊国屋書店・2100円)

## 人権は国境を越えて

〔著〕 伊藤 和子

弁護士の著者は、北京で開かれた世界女性会議に非政府組織(NGO)の一員として参加し、海外で深刻な人権侵害が続いていることを知る。米国留学後の2006年に、日

本で国際人権NGO「ヒューマンライツ・ナウ」を設立。ビルマ(ミャンマー)で法律教育を支援し、フィリピンで政治的殺害の実態を調べ、イラクで子どもの先天性障害を告

発、東日本大震災の被災地に通う。現地でも闘う人々に学びながら、駆け付けて声を上げる。真摯(しんし)な姿勢が胸を打つ。(岩波ジュニア新書・861円)

振り込め詐欺グループ

〔著〕 鈴木 大介

肉薄。電話をかける技術を教える研修の講師金役、統括する番頭、名や機材をそろえる道具資金を提供するオーナーそれぞれが見事に連携大金をだまし取るような犯罪の実態を描いた効率よく詐欺を働くされた組織構造の中で生きと「仕事」する彼姿に驚かされる。一方組織の末端では行き場を失った貧困層が使い捨てられている実情もある。ライター・著者がこだわってきた「貧困と犯罪現場現実が重くのしかかる」(宝島社・1365